ジョンとアシュリー

遥風 覇鵺渡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジョンとアシュリー

【Ｎコード】
Ｎ０８５２Ｆ

【作者名】
遥風　覇鵺渡

【あらすじ】
ジョンとアシュリー。若い二人は、緊迫した空気の中で互いに見つめあっていた……。

「ジョーンっ！」

「なんだぁっ？！　アシュリー」

二人は真剣な眼差しを互いに向けている。

ダークブラウンの髪に黒い瞳のジョン、ブロンドで青い瞳のアシュリー……。

若い二人の間には、緊迫した空気が流れている。

「ねぇっ！　あたしの事、好きって言ったわよね？！」

アシュリーのその言葉に、ジョンは苦しげに顔を歪める。

「あぁっ、言ったとも……」

「じゃぁっ、絶対にあたしを捨てないわよね！？」

アシュリーのヒステリックな叫び声に、ジョンは冷や汗をかきなが

ら……力なく俯(うつむ)く。

「ジョッ……ジョン！」

アシュリーは、血の気の引いた顔でジョンを睨み付ける。

「アシュリー……僕は、もう……たえられない」

ジョンは、ぶるぶる震えながら……目を固くつむる。

「そっそんなぁ！　ずっと一緒だって言ったじゃない！？」

アシュリーは涙をこぼしながら、ジョンに訴える。
だがジョンは、何かを諦めるような冷たい瞳で、アシュリーを見るだけだ。

「あなたが捨てたらっ、あたしは死ぬわよ！」

「そんなのわかってる！　頼むから静かにしてくれっ」

ジョンは、アシュリーの手をしっかり握りながら、谷底を見やった。
日中であるにも関わらず、谷の底は真っ暗で見えない。
そうしている間に、アシュリーの靴は、静かに闇へと落ちていった。
ジョンは汗で滑りそうなアシュリーの手をキツく握りしめる……。
もうすぐ、握力の限界だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0852f/

ジョンとアシュリー

2010年10月28日07時23分発行